

淨土

四 月 號



昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十二年三月廿日印刷納本昭和二十二年四月一日發行

第十三卷

第四號

法然上人鑽仰會發行



春の村祭り

浦野芳雄

三月には大概の村で、春の祭をする。これは来るべき諸作の豊饒と安泰とを祈念するために土地の祭神を祀るのであつて、所によると、地神を祭神としてゐる所もある。それこそ、農民の神である。天が嘯き、地が怒れば作物は何も穫れない。これが愛護を得んがために、先づ祈つて、その豊作を希ふのである。

由來百姓達が、神佛に對して祈念することの多いのは一にその庇護を受けんがためである。彼等の念するところは、かの投機師が水天宮を信仰するのとは趣きが異なる。

投機その他、これに類する者の希ひ欲するところは、たゞ自分一人だけの利益である。もし他人に同様の利徳が赴かば、自分の利徳は半減する。さらに他に利徳が廻れば、自分は空虚であるのみならず、自分の賭物さへ失つてしまふ。最も分りよく言へば、相場師の祈りは、人は悪かれ我善かれといふ言葉に盡きる。

百姓はそれとは全く異なるので、共々人も善かれ、我も善かれと云ふことである。如何に欲深い百姓でも、どんな勤勉な百姓でも、自分一人が拔駆けして、巨利を博すといふわけには行かない。神は公平に百姓に恵んでゐるので、天の仕業によつて大勢は決する。

たゞ、勤直の度、作業の巧拙、時期と天候との關係等が、その間に幾分の優劣を生ぜしむるので、しかも全部の百姓が同一の條件の下に耕作するならば、殆ど同一の結果であつて、もし百姓が至つて勤勉ならば、算盤と同じやうに、師匠と同一の結果を得られるであらう。

そのくらゐであるから、百姓は最も大きな人數を以てする偕老同穴の動物である。穫る時は共に穫り、饑うる時は共に飢ゑる、協同主義生活體をなす人類である。だから彼等の交はす挨拶が面白い。

「よい鹽梅ですね。」
「結構なお天氣です。」

「少し照らしたいものですね。」

「明日は天氣にしたいね。出穂が後れてしまふから。」
等々の、同一の利害に立つ、極めて好ましい言葉である。そして對するものも、

「少し降らなければ商賣になりませんよ。これでは傘の買手がありませんから。」

と云ふ照降屋のやうな返事をする者もなく、

「飛んでもない、これでは雨天の場合で二割増の賃金が貰へませんから。」

と云ふ照降屋のやうな返事をする者もなく、

「飛んでもない、これでは雨天の場合で二割増の賃金が貰へませんから。」

なんて、雲助の云ふやうなことも言はず、

「何、照られてたまるもんですか、川止で逗留客がなくなりそうですから。」

「なに／＼、それでは思惑の米の値が出ないよ。君。」

と云つた、商賣人のやうな者はない。

天が一視同仁に對等に待遇してをられるやうに、相互の利害も共通する。だから一村榮えれば一郷榮え、一郷豊かなれば、一國が飢えぬ例になるのである。

その踏出しの第一步を祝ふとすれば、農村の春の祭りは、全民全部が共に祈り、共に祝つて差支へないものである。

旅中の車窓に、春の祭の幟を見て、農村に住む者は、暢氣に祭などがしてゐられると思ふのは、至つて淺墓な考へである。

牧菱湖は、祭の幟に、

なんちをしててだひにしてみたらしめ
爾 艾 而 耆

なんちをしてしてしやうならしむ
爾 熾 而 昌

などと禮記の言葉を書いた。

彼岸は宗教上の行事であつて、農業とは直接關係はない筈だが、その中日が晝夜相等しいと云ふことは、天體の運行上に關する問題で、農民に對する刺戟は大きい。先づ觀面に分ることは、夜業の切上げである。夜業は秋の彼岸に始め、春の彼岸に終るのである。最も堅實な土地では八十八夜まで續行する所もある。

これから晝が長くなるから、夜業をしてゐる邊がないと云ふのは、天が彼等を繁忙期に投ずる警鐘である。かくして農家も本活動に入るのである。

蕪村の句に

命婦よりばた餅たばす彼岸哉

と云ふのがある。牡丹餅は盆と共に彼岸には附物である。これも新活動に入る糖分の補給である。



話童

ど飯

どき

あづま・しげと

お父さんは、ご飯のたびに、きちんと手をあはして、長いことおがみます。猛も優もまち遠しいくらゐです。「さあ、いたゞきませう。」

終わりますと、お父さんは静かに箸をとりあげて、さもおいしさうにたべはじめます。復員してから一日もかかしたことはありません。そして、どんなまづさうな御惣菜がでても、おいしい、おいしいと、喜んでたべるのでした。

「はてな、兵隊にゆくまへから、あんなにおがんでたかな。」

時々、猛はお父さんの出征前のことを考へてみました。しかし、もうかなり前のことです。考へれば考へるほど、だんだんぼやけてしまつて、はつきりしませんでした。

「だが、食べものに好ききらひはあつたな。こんなまづいものが食べられるかいつて、よくお母さんに文句言つてたのをおぼえているもの……。僕もまたお父さんのまねをして嫌いだと、お母さんをしてこずらしたつけ……。」

猛はお父さんが歸つてこられてから、なんだかせんと様子が變つてゐるようで、こんなことをしよつちゆう考へてゐました。

寒い朝でした。

「猛に優や、とつても寒い日だよ。」

お臺所で御飯のしたくをしてゐるお母さんが、手をまつ赤にしながら顔を見せました。

「そうお、起きようかな……。」

「寒いからもうちよつとやすんでらつしやい。」

お父さんもまだやすんでゐます。

「一、二、三。起きたつと。」

お父さんが元氣よくとび起きました。猛も優もはね起きました。ほんとに寒い朝です。水道もこぼつてゐます。お部屋の中にいれてあつた手洗ひ水には、うすい氷がはつてゐます。顔をふいた手拭が、すぐかちかちにこはばつてしまひます。

「零下五度だもの、一とう寒い朝だ。」

お父さんがお部屋の掃除をすませて、おいしさうにた

ばこそをすいました。猛と優が受持ちの掃除をすませると
「おう、さむ。」と大聲をあげてかけこんできました。
「大げさね。きれいに掃いて？」

「もちろんさ、ねえ。」

「では御飯にませう。の、さんへあげてちようだい。」
猛はチーンとりんをならしておがみました。毎朝の役
目です。お父さんの歸つてこないうちは、早く歸つてき
ますようにと、おねがひしてゐましたが、この頃はお願
ひすることもないので、たゞ心から頭をさげるのですが
なんともしへない、氣持です。溫かい御飯の湯氣がゆ
らゆら佛様をつゝんで、なんとなく清らかです。やつと
みんなお膳にすわりました。溫かい御飯に味噌汁が、ほ
かほか湯氣をたてゝ、とてもとてもおいしさうです。で
もお父さんは手を合して靜かにおがんでゐます。早くす
まして……猛も優も待ちどほくて、なんどもお父さんの
顔をねめつけました。

「お待ちどほさま、さあいただきますませう。」やつと終りま
した。猛も優も「いただきます」と言ふが早い、御飯
にかぶりつきました。おばあさんがこつと笑ひました
「落着いておあがり、おいしいなあ。」

お父さんはにこにこして、ゆつくりゆつくりたべはじめ
ました。

「お父さん、毎朝、なにをおがんでゐるの。せつかくの
熱い味噌汁もさめちやうじやないの。」

猛はいくらか不まんげにたづねました。

「それはね、お米やお野菜を作つてくれるお百姓さんや
かうして食べられるようにしてくれるいろんな人にお

禮を言つてゐるのだよ。」

「だつてお百姓は高いお金をとつて、都會の僕たちを苦
しめてるじやないの。」

「とんでもない。お米やお野菜が高いのは、ほかに悪い
人がゐるからだよ。お百姓さんは日本中の人々に少しで
も多量たべてもらはうと、どんな寒い日でも暑い日でも
せつせと働いてゐる。かうして溫かい御飯をたべられる
のは全くお百姓さんのおかげだよ。それにものを作ると
いふことは一通りの苦しみじやない。お父さんはヒリッ
ピンの山の中で、たべるものもなく、死ぬやうな苦しみ
をしたが、つくづく食物の有難さをさつた。それから
歸つてきて、ほらお母さんが作つてゐた畠で、少しばか
り野菜を作りはじめたらう、ところが作りやすい野菜
でも、たべられるやうになるまでには、なかなか手がか
ゝるものだ。生れてはじめて畠をやつてみて、これじや
お百姓さんは大變だなあと、その骨折りがからだにこた
へてやつと分つた。かういふわけで、お父さんは一粒の
お米でも勿體なくて、お百姓さんの骨折りに手を合せず
にはをれなくなつたのだ。そのほかいろんな人の目に見
えない骨折りがあるのだ。ヒリッピンの山の中のことを
思ふと、どんなものでも御馳走で、おいしい。心から有
難くいただきます。まつたく食物は不足してゐるけど、か
うして御飯をいただきますのは、ほんとにしあはせだよ。」
お父さんは靜かに話しました。猛も優もだまつて熱心
に聞いてゐましたが、二人とも、明日から僕たちも手を
合せてから御飯をたべようと、心にきめました。

(をばり)

信仰相談

念佛するとなぜ救はれるか

擔當 中村 辨 康

(問)

私達の精神的な悩みは畢竟煩惱の然らしむるものと思ひますが、この私達の煩惱はその多くは本能に基くものと考へられます。然かも佛道修行はこの煩惱を克服して清淨な心の持主になることであり、そしてそれ故にこそ「救はれた」と云ふことにもなり得るものと存じます。然るに煩惱はそのまゝにして居ても念佛すれば救はれて煩惱なき人と同じ様な境地になれるとはどうも合點されません。それもとゞ阿彌陀佛の本願だからと云ふのでは、私にはどうしても納得されません。若し本願だからとか本願を信じさへすればよいとか云ふならば、誰か願を立てさへすればその通りになり得るのでありませうか。そんな

簡単なものではあるまいと存じます。然かも念佛すれば救はれると云ふのでは分りません。何故に念佛すれば救はれるのでせうか。恐入りますがよく分るやうに御説明下さいまし。

(長野・上高井・大川英隆)

(答)

恐ろしくむづかしい御質問でございますが、これは「本願」と云ふものを個人的な願望と同様に考へて居られるところから來た疑ひかと思ひます。阿彌陀佛の本願は天地自然の道理を具體的に表現したものでありまして、單なる個人的な誓願ではありません。天地自然の現象と云ふものを佛教では「實相」と云つて居りますが、この實相の現はれ方について、その道理を三通りに云つ

て居ります。その一は「因果の道理」であります。これは「或る結果には然かあるべき原因があるのであるから、苦惱を招くやうな原因を作るな」と云ふ幼き者達への道德的教訓の爲のものでありまして、一面の眞理ではありますが、まだ宇宙の實相の全部を説明するものではありません。例へば今度の戦争の如き一部の中心的人々の意圖に依つてなされて居るのであつて、私達國民の大多數は唯だ引きづられて居たのに過ぎません。然るにその結果たる苦惱は現に生きて居る私達を初めとして事變以後に生れて來たもの、若しくは今後生れて來る赤ン坊までもが受けなければならぬのでありますからこれは「他因自果」であり「無因

有果」でありまして、因果の道理からは矛盾であります。即ち他人のなした原因の爲に、自分には無關係であつたのに拘らず、苦惱を受けねばならぬとは誠に無慙なことでございます。このやうに實相は因果の道理だけでは割り切れぬものがあるのであります。それで第二の道理は「緣起」と云ふことであります。これは因果の堅の關係だけであるのに、横の關係を加へて、凡ての事象は皆な多かれ少かれ深かれ浅かれ悉く關係して居ること、宛かも網の目の如きものであると説くのであり、そしてこれこそ宇宙の實相を説明するものであると云ふのであります。即ち一の現象と云ふものは宇宙間の凡てのものに關係して居り、それに

對して直接力を與へて居るものも、それに反對したものも、又は一見無關係の如く見えるものも、皆な悉く一つの縁としてその現象する條件をなして居ると云ふのであります。

それ故この道理の分つたものは本當の「法」が分つたものであつて「縁起を見るものは法を見る」と云つて居る所以であります。この縁起の道理は宇宙の眞理であつて、この縁起の取扱ひ方に依つて色々な宗派も出て來るとのこととてございします。それは縁起觀の發達に依るからであります。

然しながら尙ほ考へて見ますのに、これは唯だ置かれてある現象のまゝを素直に見ただけのものであります。一縁去り一縁來りして刻々に變化する現象の表面觀に過ぎません。何故に一縁去り一縁來りつゝ刻々に變化して行くのかまた何故に刻々の變化が死せるものは單なる變化であるにも拘らず生ける者は進化しつゝ行くのであるか、それはその内面に含藏され

て居る力、即ち潛勢力の然らしむるところと思はれるが、それは何であるかと云ふことなどが考へられて居りません。これは第三の道理たる「性起」が説かれる所以であります。

「性起」の「性」は「法性」の「性」であり「起」は「縁起」の起であつて「現象すること」であります。即ち「縁」の變化する根源は「法性」であり宇宙に潜在する「法性」の發動に依て刻々に變化する「縁起」があるとするのであります。然かも「法性」とは「生きる力」でありますから法は單なる法則ではなくして物を「いかす」ところの法なのであります。されば事物は「諸物」ではなくして「諸法」なのであります。即ち法はいきる「力」であり、いきる力の發動して居る姿が「物」であり、その發動する根源が「性」であります。随つてその「法」の「性」が發動するから「性起」と云ふので、例へば親の心が常に我が子の上に「よかれかし」と動いて居るやうに、天地の中に内在する「一切のものをいかす力」が、天地の性格となつて常に動いて居るからこそ、一切のものは夫々向上する心を持つて居るのであり、自らをよりよく

生かさんと志して居るのであります。

然してこの「法性」の動きの最も純化されたものが阿彌陀佛の本願であります。されば單なる一個人の願望とは異なるのであります。それ故に五劫思惟とも云ひます。無量の時間がその表現に費やされたのであります。また其上に「長載永劫の修行」とも云つて居ります。即ちその實現が凡ての上に可能か否かが實證されるのに數へられない時間が要されたのであります。そしてその物語は法藏菩薩と云ふ個人の名で表現されて居りますけれども、法藏と云ふ言葉が示すやうに「法性の藏」の状態でまだ法性の理が現はれて居ないので表面化することに長い時間がかつたことを示すものであります。と云つてそれは初めから無かつたものがその時初めて有つたのではありません。例へば電氣が天地間になかつたのが發明されてから初めてあつたのではなくして元來あつたものが電氣器具が發明されて初めて私達に利用されるやうになつたのと同じく、天地の道理が法藏菩薩の名に托されて私達に有効になるやうになつたのであります。然かも此の「法性」は「いきる

力」で、その「いきる力」は謂ゆる「いのち」に外なりませんから随つて天地間にあるものの根元はこの「いのち」であるのであります。即ち一切の萬物は「いのち」の變化であります。私達と雖も天地の大生命の一變化物であります。即ち自らに分けられたものであります。だからこそ小生命であり制限された小さな時間であります。しかもこの制限された小生命を天地の大生命たる法性に歸一せんとする心を起すことは、是亦た自然の歸趨でありまして、道理上むしろ當り前のこととあります。その理をハツキリと私達に分らして下さつたのが、お經に説かれた法藏菩薩の本願なのであり、その理を私達の感情の上にハツキリと表現させて下さつたのが「南無阿彌陀佛」と云ふ言葉であります。南無阿彌陀佛と唱へる念佛に依つて、天地の大生命に歸一の出來る「性起」の道理を理窟でなく、安々と表現出來るやうに仕組まれてあるのが本願であり、本願の念佛なのであります。それ故煩惱を斷ぜずして然かも天地の道理に直參直入することが出來ると云はれるのであります。大分むつかしいでせうが御熟讀願ひます。

會員の頁

「浄土」編輯上の希望

佐賀市 早田哲雄

宗門の爲になみなみならぬ努力犠牲を拂はれて「浄土」發行に精進せられてゐる血みどろの御骨折に對して満腔の感謝と敬意とを捧げてゐます。戦災の帝都で紙と印刷とへの御苦心は想察するだにお氣毒でなりません。之に對して地方寺院としての御協力の道は讀者の獲得ですが私も之に努力致したく思つてゐます。戦前は拙寺でも支部を設けていさゝか協力して参りましたが、戦争で微少ながら被害があり、別に一昨年の風災に依つて大打撃をうけて今十萬圓ほどの復舊措置で奔走してゐますが、何れ近く「浄土」讀者を得て再び支部を設立したいと思つてゐます。

さて「浄土」誌代一ヶ年二十圓

になつてゐますが、誌代のみでの經營は大變でせう。私は参考に京都百華苑發行の「信仰」を購讀してゐますが、一年分二十圓、ページ二十六、外にかなりの表紙二枚で、表裏共に一寸した石版色刷りで大變感じがよくスマートに装幀されてゐます。そして殆ど毎號裏に武田藥品工業の廣告が一頁つてゐます。又法衣店その他の廣告がのつてゐます。「浄土」には廣告が殆どありませんが面倒でも東京には本宗特信の大商人大實業家も多いこととせうから廣告などで應援をすることも經營上の一方法ではないでせうか。又裏表紙などに廣告して地方よりの廣告を募集するのによくないでせうか。知識人の研究雜誌の如きは装幀など苦心する必要も少いのですけれど、殊にかやうな信仰的の雜誌は其の装幀が讀書欲をそよるやうに氣持よくあらせることは大きな條件の一つでせう。

次に最も大切なことが論說の内

容ですが、勿論編輯の御苦心の存する所であると存じますが、學的の硬いものも少々は宜しいと思ひますし必要でもありますが、それよりも一二流の布教家などの通俗的の信仰論說が一番重要な位置を占めるべきではないでせうか。最も俚耳に入り易い、小學校卒業程度の者に十分納得させる普遍的な作品説話を中心とすることが布教雜誌の生命ではないでせうか。剛柔宜しきを得べく御苦心になつてゐることはわかつてゐますが、今日の國民の宗教的教養は誠に低級ですから本宗僧侶の讀者を除いては宗教的にも浄土宗的にも全然無知であると見て、之に對して宗教情操、浄土宗義等を教育するといふ方針で御編輯になつたら先づ間違ひのみならず、大いに受けるのではないかと信じてゐますがどうでせうか。浄土宗布教全書その他から轉載したり抜萃したりすることは一法ではないでせうか。要は讀者に信仰を獲得せしめれば足る次第です。

「浄土」 四月號

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和廿二年 三月二十日印刷

昭和廿二年 四月一日發行

(定價三圓)

東京都芝區芝公園浄土宗務所

編輯兼 眞野 正 順
發行人

東京都神田區神保町三ノ一〇

印刷人 春山治部左衛門

東京都神田區神保町三ノ一〇

印刷所 共立社印刷所

配給元

東京都神田區淡町路二ノ九

日本出版配給株式會社

發行所 法然上人鑽仰會

東京都芝區芝公園浄土宗務所

振替 東京 八二一八七番

會員番號 B 一〇八〇一四

會費 金 四十二圓
一ヶ年

(送料六圓を含む)

振替拂込みはすべて一圓五十錢増のこと

定價金 三圓 (送料五十錢)